

平成 17 年度 土木学会 選奨土木遺産決まる！

2005 年 10 月 28 日(金)に記者発表が行われた。その対象となる建造年代は、全国調査が完了している近代(幕末～昭和 20 年代)に完成したものである。

<北海道支部>北海道電力(株)雨滝発電所(北海道風連町、昭和 18 年)／宗谷線剣淵・士別間 鉄道防雪林(北海道剣淵町、昭和 17 年)／チキウ岬灯台(北海道室蘭市、大正 9 年)

<東北支部>尾去沢鉱山施設群(秋田県鹿角市、昭和 18 年)

<関東支部>国道 1 号箱根の橋梁・洞門(神奈川県箱根町、昭和 6、8 年)／宇都宮市水道施設群(栃木県宇都宮市、大正 5 年)／めがね橋(倉松落大口逆除)(埼玉県春日部市、昭和 24 年)／めがね橋(千葉県白浜町、明治 21 年)／勝沼の鉄道隧道群(山梨県勝沼町、明治 35 年)

<中部支部>稲生港石積防波堤(愛知県蒲郡市、大正 9 年)／安部川橋(静岡県静岡市、大正 12 年)／木曾川・揖斐川道流堤(三重県桑名市、明治 23、42 年)

<関西支部>御堂筋(大阪府大阪市、昭和 12 年)／御坂サイフォン(兵庫県三木市、明治 24 年)／東山トンネル・新逢坂山トンネル(京都府京都市、滋賀県大津市、大正 10 年)

<中国支部>福浦隧道(初代、二代目)(島根県隠岐の島町、明治初年、31 年)／旧大浜崎船舶通航潮流信号所(広島県因島市、明治 43 年)

<四国支部>大宮橋(愛媛県西条市、昭和 2 年)

<西部支部>明治橋(大分県白杵市、明治 35 年)／大田発電所(鹿児島県伊集院町、明治 41 年)

(土木学会事務局)

第7回インターナショナルサマー シンポジウム(The Seventh Inter- national Summer Symposium)開催

2005 年 7 月 30 日(土)に土木学会において、第 7 回インターナショナルサマーシンポジウムが土木学会国際委員会(委員長：高橋修・日本工営株式会社代表取締役社長)の主催で開催された。このシンポジウムは土木学会の国際活動の一環として、英語での研究成果の発表の機会を設けることにより、日本に滞在中の留学生・エンジニアを中心に、国際交流と相互理解を深める目的で企画されたものである。1999 年から開催され、7 回目となる今回は 103 名の参加者(外国人学生・エンジニア 60 名、日本人学生・エンジニア 43 名)を得て、7 部門・83 件の研究発表と基調講演、ならびに懇親会が行われた。今回のシンポジウムは、土木学会学術交流基金の助成を受けて実施された。

シンポジウム当日は、午前・午後合わせて計 13 の一般講演セッションと 1 題の基調講演が行われた。基調講演では、土木学会中部支部長で、名古屋大学大学院教授の宇佐美勉先生による“Recent Developments in Seismic Upgrading Methods for Steel Bridge Structures”と題した講演と活発な議論が行われた。一般講演での発表は、日本滞在中の留学生のものがその多くを占めたが、日本人の発表も多く、参加者相互間の有意義な情報交換ができたとの声が聞かれた。

最後に参加者が一堂に会し懇親会が



開会式の様子

催され、その中で優秀発表講演者(17 名)に賞状と記念品が授与された。懇親会での参加者間の活発な交流によって、シンポジウムの主目的である国際交流と相互理解はさらに促進された。(国際委員会留学生分科会 第 7 回サマーシンポジウム組織委員会 委員長 葛 漢彬(名古屋大学))

「橋梁工学に関する日本- バングラデッシュジョイント セミナー」が開催される



開会式の様子

2005 年 8 月 10 日にダッカ(バングラデッシュ)において橋梁工学に関するジョイントセミナーが開催された。本セミナーは土木学会(国際委員会、鋼構造委員会)とバングラデッシュ工学会(Institute of Engineers, Bangladesh)、土木工学部門が共催で開催したものである。さらに、バングラデッシュ政府道路局と Jamuna 多目的橋梁公団が後援として協力している。

バングラデッシュ工学会会長の Azim 氏による開会挨拶の後、長井正嗣氏(土木学会鋼構造委員会前委員長)が挨拶を行い、本ジョイントセミナーの主旨などが説明された。さらにバングラデッシュ政府建設通信大臣 B.N. Huda 氏が今後とも橋梁工学の発展を政府としても後押ししていく旨の挨拶があった。

上記のオープニングセレモニーの後、4 つのセッション(地盤、鋼・コンクリート合成橋梁と新材料、構造動力

学、モニタリング)において、研究発表と活発な意見交換が行われた。なお、日本からは前述した長井氏(長岡技術科学大学教授)のほかに、森猛氏(鋼構造委員会幹事長・法政大学教授)、山田均氏(横浜国立大学教授)、山口栄輝氏(九州工業大学教授)と奥井が出席し、講演を行った。

(埼玉大学助教授 奥井 義昭)

**土木学会学術交流基金
平成 17 年度スタディ・
ツアー・グラント 報告**

土木学会では学術交流基金を活用し、毎年海外協定学会の推薦を受け、土木技術者を日本に招聘している(スタディ・ツアー・グラント)。本年度は9月2日から10日までの間、マレーシア工学会の推薦により、タン・イェン・チン氏(37歳)をお招きした。タン氏は、コンサルタントに勤務し、地盤分野で幅広く活躍されている土木技術者である。また若くしてマレーシア工学会の副会長を務めている。

日本滞在中は、港湾空港技術研究所、鉄道総合技術研究所、大林組技術研究所、明石海峡大橋や関西国際空港などを視察され、また、9月7日から開催された土木学会全国大会にも参加し、ラウンドテーブルミーティングなどの国際関係行事に出席された。

短期間の日本滞在中で、多くの研究施設・社会基盤施設を数多く視察され、また休日にも日本の観光施設を訪問するなど、ハードなスケジュールではあったが、精力的に活動された。4月にはマレーシア工学会の視察団が日本を訪れたこともあり、両国の土木技術者の親交、さらにはマレーシア工学会との連携の強化につながることを願いたい。

(学術交流基金管理委員会幹事長
河村 秀紀(大林組))



左からタン氏、河村幹事長、田中委員長(学術交流基金管理委員会)

業績評価国際会議 日本で開催

2005年11月16日、土木学会の主催により業績評価に関する国際会議が同講堂で開催された。

午前中は、「日英米業績評価ワークショップ」と称して英国行政官(リチャード・イーストマン英国道路庁道路網戦略局全国道路網課課長以下7名)および米国行政官(アンソニー・ケイン米国道路交通管理者協会技師長以下3名)を囲んで、土木学会土木計画学研究委員会「社会基盤の政策マネジメント研究小委員会」のメンバーほか、多数の参加により討議が行われた。成果目標を設定し厳格に評価を行い、その結果を予算に反映し、説明責任や透明性を徹底するという業績評価について、事例を含む幅広い報告と活発な議論が交わされた。

午後には、日本道路協会との共同主催で「日英米の道路行政の動向と業績評価に関するセミナー」が開催され、産学官・マスコミ関係者など約140名が参加し、各国の最新動向についての講演および意見交換が行われた。成果



を重視する業績評価により、予算の効率的執行、国民・議会に対する説明責任や透明性の向上などを通じて投資の必要性を明解に示すことができ、英米両国で大きな成果があがっているとの報告が行われた。

わが国においても成果を重視した行政運営がスタートしたところであるが、英米のような評価システムがわが国でも早く定着することを痛感させられた会議であった。詳細は小委員会のホームページまで(<http://www.jsce-ipmcommittee.com/index.htm>)。

((財)日本総合研究所 栃木秀典)

**土木学会関西支部 主催
地方見学会 2005 開催**



九頭竜川鳴鹿大堰の魚道を見学する参加者

2005年10月15日の土曜日、福井県の協力のもと、地方見学会『建設中のダムと川の流れを調節する大堰を見に行こう』を開催した。全国各地から参加いただいた幅広い年齢層の方々(50名)が、午前9時30分に福井駅を出発し、九頭竜川沿いの道をバスに揺られながら、下記の3箇所を1日かけて見学した。あいにくの雨のため、ダム湖底の見学が割愛となったが、日頃見ることもない施工現場などを目の当たりにし、たくさんの質問が交わされた。参加者の中には、昨年の豪雨災害を体験された方もおられ、防災への関心を非常に高くお持ちであることがうかがえた。

アンケートの結果、「楽しかった」が87%、見学の内容が「よくわかつ

た」が97%と大変好評だった。これは、親切でわかりやすい説明のみならず、質疑に対して誠意をもって応答していただいたおかげである。ご協力いただいた関係者各位に心よりお礼申し上げる。

①浄土寺川ダム(勝山市)

2006年10月の完成をめざし施工中のコンクリートダム現場で、工事概要や施工方法、ダムの役割について学んだ。

②福井県立恐竜博物館(勝山市)

さまざまな恐竜の骨格や模型が、時代ごとにわかりやすく展示され、昼休憩を兼ねて見学した。

③九頭竜川鳴鹿大堰と九頭竜川資料館(永平寺町)

5年の工事期間を経て新しくなった堰について、堰の歴史や私たちの生活と川との関わりを学び、生態系を配慮した魚道の見学を行った。

(中央復建コンサルタンツ(株))

測量・地盤系グループ 今井千鶴

土木学会関西支部 主催 一般市民対象見学会 2005 開催

2005年11月5日の土曜日、一般市民対象見学会～京都と大阪をつなぐ新しい道路と線路を歩いてみよう！～を開催した。抽選で選ばれた100名の方が「第二京阪道路(午前の部)」と「中之島新線(午後の部)」の建設現場を大型バス2台に分乗して見学した。昼食後は、京阪電車(枚方市駅発準急)を一車両貸切りにして、参加者全員、新線現場に直行した。

アンケートの結果、「楽しかった：91%」、見学会の内容が「よくわかった：67%」、「難しかったが、だいたいわかった：30%」と好評であった。これは、見学先担当者がわかりやすいビジュアルな資料やビデオを使い、専門用語を平易な言葉に置き換えて



切替え工区の新しい軌道部にて説明を受ける参加者

説明いただいた効果である。創意工夫のうえ、ご尽力いただいた関係各位には心からお礼申し上げる。

①第二京阪道路(国道1号バイパス)

供用下にあるコンクリート連続高架橋(京田辺市)、工事が進められている下部工の現場(交野市倉治)を見学し、橋脚のデザイン性や道路景観の考え方、排水性舗装の機能など、人にも環境にもやさしい道づくりを学んだ。

②中之島新線(京阪電鉄直通運行/大阪市)

現在、運行している京阪本線を中之島新線に切替える現場、最も深い位置を通る新北浜駅の開削現場(土留壁を地下80mまで造成)を見学し、新線が整備されることにより、水の都大阪を支える中之島の土地利用が高度化し、交通アクセスが向上することを学んだ。

(日本建設コンサルタント(株)大阪支社 祖川義雄)

「土木の日」関連行事 関西地区連絡会主催 土木の日コア行事見学会 2005 開催

「土木の日」のコア行事として、「土木はあなたの暮らしを支えています！」をテーマに見学会を11月12日の土曜日に開催した。当日は天気にも恵まれ、多数の応募者のなかから抽選で200名の方に参加いただいた。



尼崎閘門を通り抜ける船を見学する参加者

午前は、供用開始から10年が経った関西国際空港I期島の止水壁工事、沈下対策工など、土木構造物の維持管理について、午後は場所を尼崎港に移して水害から市民の暮らしを守る日本最大級の尼崎閘門の仕組みや機能について学んだ。

①関西国際空港止水壁工事

異常潮位から関西国際空港I期島内の構造物を守るためにI期島外周に沿って構築する止水壁工事の現場を見学した。1/20スケールの建設機械模型、パネルやビデオを使用して工事説明を行い、その後、船に乗り海上から止水壁工事現場を見学した。また、旅客ターミナル地下1階において、沈下対策工として柱のジャッキアップ構造を見学した。

②尼崎閘門の通り抜け

平均海水面より低い海拔ゼロメートル地帯が市域の約40%を占める尼崎市の市民生活を水害から守る尼崎閘門、防潮堤施設などを見学した。実際に船に乗り閘門の通り抜けを行うなど、体験しながら施設の仕組みや機能について理解していただいた。

③土木実験・土木クイズ

地震時に発生する「地盤の液状化現象」について、土木学会幹事手づくりの実験装置で土木を身近に体験していただいた。特にペットボトルを使用した実験では、子供たちが楽しそうに自ら実験を行っていた。その後、今回の見学会で学んだ土木に関する

ことをクイズ形式で楽しく再確認していただいた。

見学会終了後、アンケートの結果を見ると、見学会が「楽しかった」が88%、見学会の内容が「だいたいわかった」以上が91%と概ね好評であった。また、「土木が市民生活を支えているのがよくわかった」、「土木についての理解が深まった」、「土木について興味が沸き、見る目が変わった」など見学会の目的とするところの結果が得られたことは、わかりやすいビジュアルな資料を使い、専門用語を極力平易な言葉に置き換えて説明いただいたことや船に乗って実際に閘門の通り抜けを行うなど、体験型の見学会であったためと思われる。創意工夫し、ご尽力いただいた見学会関係各位に心から感謝申し上げます。

(鹿島建設(株)関西支店 西松利真)

「道路緊急ダイヤル #9910」がスタート

2005年12月1日から、道路に穴ぼこ・路肩の崩壊などの損傷、落下物・汚れなどの異常を発見した場合には、「道路緊急ダイヤル」きんきゅうトラブル9910を利用すれば、全国どこでも、また1日24時間いつでも道路管理者に直接通報ができるようになりました。直接通報を受ける道路管理者は、国土交通省の各地方整備局と首都高速道路などの各高速道路株式会社です。なお、高速道路の場合には事故・故障車の通報も受け付けます。



高速道路上の落下物 (提供:首都高速道路(株))

通報を受けた道路管理者は、速やかに対応して道路の安全を確保します。なお、補助国道(県や政令市が管理する国道)、県道、市町村道など地方自治体が道路管理者である場合には、各地方整備局が通報を受け付けてなるべく早く(翌日以降となる可能性もあります)その地方自治体に連絡する体制となっています。

どの道路管理者に対しても同一の4桁短縮番号を通報先にすることで、道路緊急ダイヤルを国民に広く普及させることを狙いとしています。なお、固定電話からは無料ですが、NTTドコモ、au、ボーダフォンからは当面向料となります。

この道路緊急ダイヤル #9910 は、2001年6月から首都高速道路でサービスが開始され、九州地方においても2005年3月から先行導入していたものです。

(編集委員 石丸浩司)

鉄道安全シンポジウム開催

2005(平成17)年10月24日(月)、日比谷公会堂において「鉄道の日」実行委員会と鉄道・運輸機構の共催による「鉄道安全シンポジウム」が開催され、当初予定の1,000人をはるかに上回る約1,300人も聴講者が来場し、会場は熱気に包まれた。

まず第1部として「鉄道事故とその教訓、そして安全性の更なる向上へ」と題して井口雅一東京大学名誉教授・宇宙開発委員会委員長による基調講演が行われた。

第2部では「鉄道事故とその教訓」をテーマに国内外の事故事例などについてウルリッヒ・マルティン：ドイツシュツットガルト大学教授、ミッシェル・エティエンヌ：フランス国鉄安全担当局長、キャロリン・グリ



フィス：イギリス運輸省鉄道事故調査部首席監察官、栗原俊明東京地下鉄株式会社取締役による基調報告が行われた。

第3部では、中村英夫武蔵工業大学学長をコーディネーター、家田仁東京大学大学院教授、宇賀神博武蔵野大学教授、鉄道安全推進会議〔TASK〕事務局長で弁護士の佐藤健宗氏、畑村洋太郎工学院大学教授、平石富男NHK解説主幹、交通経済ライターの三戸祐子氏をパネリストとして迎え、「より安全な鉄道へ～鉄道事故とその教訓～」をテーマにパネルディスカッションが行われ、多様なジャンルの専門家からさまざまな意見が出され、熱心な議論が交わされた。パネルディスカッションの最後に議長アピールが発表されてシンポジウムを終了し、鉄道の安全への強い再認識を主催者、聴講者ともに共有するなど、大きな成果を得た。

((独)鉄道・運輸機構 栗原要一郎)

「100万人の市民現場見学会」土工協が達成イベントを挙行

(社)日本土木工業協会が「100万人の市民現場見学会——建設業は今」のキャッチコピーのもと、公共土木工事現場の見学会をスタートさせたのは2002年11月末。以来3年、一応の区切りとなる100万人目の参加者を迎えたのは去る10月下旬であった。

この100万人到達を1つの通過点として、第2ステージでは新しく「防



災」をテーマに「100万人の市民現場見学会——暮らしを守る国づくり」として、さらなる見学会を展開することになっている。このアピールの意味も含め、11月18日の「土木の日」に首都高速道路中央環状線の建設現場である初台基地において「100万人達成イベント」を挙行政した。

見学会をスタートさせた趣旨は、国民や市民が安全で豊かに安心して暮らせるようにするには、まだまだ整備しなければならない社会資本があることを広く理解していただくとともに、事業のあり方などについても、市民の声を直接聞かせていただきたいとの思いからであった。

見学会で聞かれた声(アンケート4,178通を分析)には、「公共事業は“自然を破壊する”“無駄な事業が多い”“何をやっているのかわからない”」といった率直な批判もある一方で、「見学会に参加してみて、“事業は環境や安全についても細やかな配慮がされていることがわかった”“事業の意義

が理解できた”“社会資本整備によって安全、安心に生活できていることがわかった”」との意見が多くあった。

土工協は、これらの批判や疑義の声にも謙虚に耳を傾けて今後の活動に活かすべく、現場見学会を鋭意続けていく方針である。

(フェロー会員(社)日本土木工業協会
副会長兼広報委員長 山本卓朗)

土木の日関連イベント 「第4回☆メロディブリッジ コンテスト」開催

このイベントは、渡ると音を奏でる橋の製作コンテストで、土木技術者を目指す学生や若い土木技術者たちに、これまでにないユニークな発想をもって、土木構造物を工夫して創る楽しさを体験してもらおうとともに、より多くの市民にイベントを楽しみながら「土木」に興味をもってもらうことを目的として開催している。また、関西発の全国的なイベントへの発展と、応募作品が1つでも多く実橋へと生まれ変わることを期待している。



最優秀賞 御影工業高校

コンテストでは、各チームの作品PRの後、専門審査と一般審査の合計得点で順位を決定した。専門審査は、専門審査委員11名が、全体の完成度、構造的特徴、意匠、音が鳴る原理、歩行者の安全性への配慮、経済性の6項目について評価した。一般審査は、同時開催の「土木の教室」参加者や一般の通行者総計263名に実際に橋を渡ってもらい気に入った作品に投票していただいた。

審査の結果、神戸市立御影工業高等学校が最優秀賞を獲得し3連覇を達成。最後の御影^{みかこう}工生として有終の美を飾った。2位には和歌山県立和歌山工業高等学校、3位には神戸市立工業高等専門学校、審査員特別賞として神戸大学工学部橋梁研究室の作品が選ばれた。一般審査員からは「アイデアいっぱい面白い」、「見るだけでなく、体験できて楽しかった」、「実際にこんな橋がたくさんあると楽しいと思う」などの感想が寄せられた。

開催日：2005年11月5日(土)

場所：JR神戸駅前地下街「デュオこうべ」

主催：「土木の学校」(理事長：黒田勝彦神戸大学工学部建設学科教授)

共催：国土交通省近畿地方整備局
兵庫国道事務所

問合先：「土木の学校」事務局

(編集委員 神戸市建設局道路部
横野勇人)